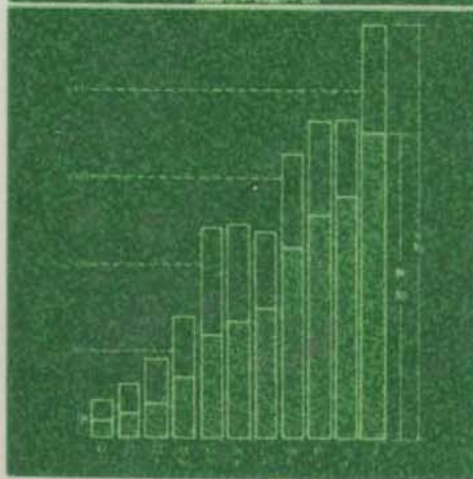
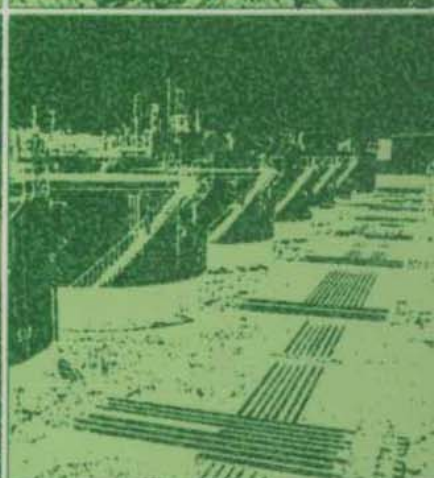
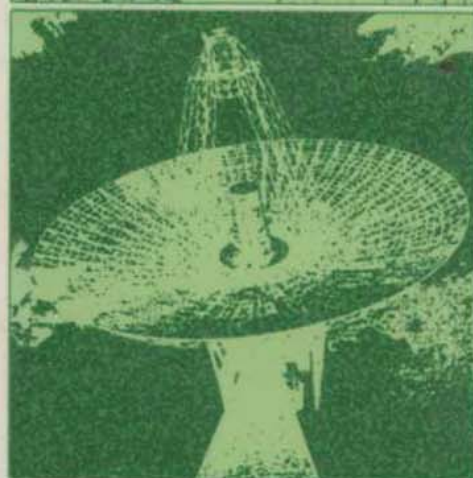
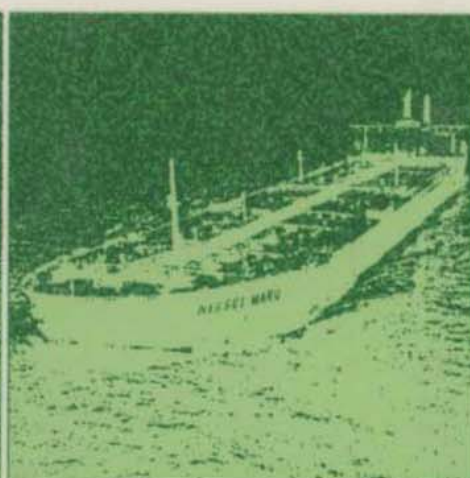
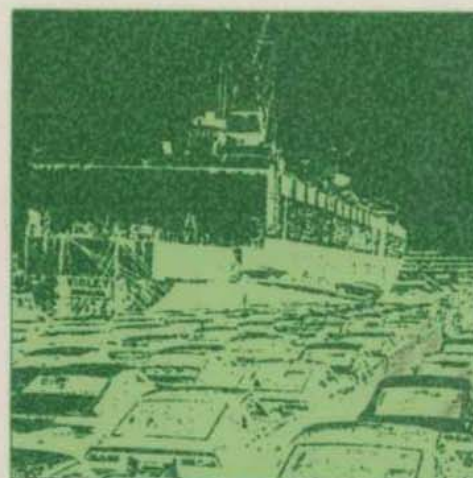
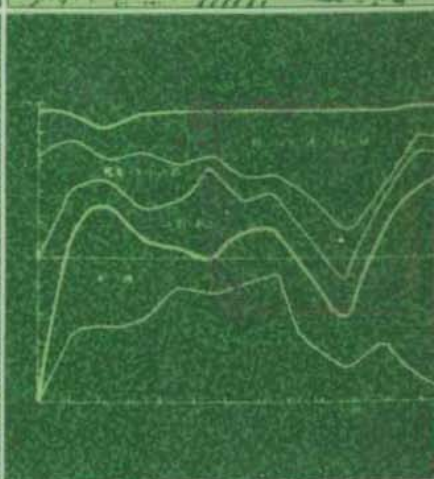


保險業界

一著孝海廣

[illegible]

広海 孝一 (ひろうみ・こういち)

1926年 北海道生まれ

1948年 東京商科大学 (現・一橋大学) 卒業

現 在 一橋大学教授

1982年 6月25日 第1刷

産業界シリーズ・307

保険業界

定価880円

著 者——広海 孝一

発行者——高森 圭介

発行所——株式会社 教 育 社

販 売——教育社出版サービス株式会社

〒102 東京都千代田区富士見2-11-10 丸十ビル

電話 (03) 264—5477 (代)

(分)2260 (製)72007 (出)1498 © 広海孝一 1982

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

産業界シリーズNo.307

保険業界

広海孝一著



教育社新書

まえがき

危険から暮らしを守るために、あるいは、危険の発生がきっかけになって企業経営がとんざすることのないように、ほとんどの人びとが何らかの保険を利用している、というのがわが国の最近の実情であるように思われる。保険の社会的な利用度の上昇とともに、保険サービスを提供する側の保険産業は、有力な産業部門としての地歩を確立し、その規模は世界的なレベルに達している。今や、わが国は世界有数の保険国になっている。

保険は、つまるところ、比較的わずかな保険料を負担することによって、特定の危険が発生した場合に多額の保険金を確かに支払ってくれるという約束をとりつけているものであって、そのこと自体はむしろ単純明快である。しかし、そのような経済的効用を生み出す社会的な過程は、必ずしも簡単ではなく、かえって技術性・専門性の度合が高く、保険を利用する一般の人びとにとっては、おそらく複雑で難解なものになっているに違いない。そこで、単に抽象的な保険の仕組みについての数理的な説明だけでなく、また、保険商品あるいは保険契約につい

ての専門的な詳細な解説でもなく、わが国の保険産業の全体像をできるだけ平易に、かつ、正確に示すことができるならば、保険を利用する人びとに保険の実態を身近かにしかも社会的な広がりをもつて理解してもらえないか、と考えた。

まず第1章では、わが国の保険産業の輪郭とその特色を示そうとした。次いで第2章では、一〇〇年あまりの歴史を持つに至った日本の保険産業の沿革を大筋において把握してもらえようにした。第3章では、個々の保険企業が保険サービスという商品を生産し販売する活動を行うに当たって、具体的にどのような諸活動をしているかをうかがうことができるように論述した。第4章では、保険市場の構造について言及した。最後の第5章においては、保険企業が種々の企業努力をした結果、保険産業全体として、どのような成果をあげているのか、現在、いかなる課題をかかえているのか、について考察を試みた。

本書は、六年前に初めて書き下ろされ、三年前に章別編成や内容に大幅な改訂をほどこして新版として出版された。今回の第三版は、新版をベースにして最近三年間の事態の推移をフォローし、最新の実情ができるかぎり反映されるように種々書き改めたものである。

目次

第1章 保険産業の輪郭と特色	17
1 保険産業の輪郭	17
A 保険産業の事業主体	17
保険事業と共済事業／六種類の事業主体／保険会社、在日外国保険会社／郵政省（簡易生命保険及び郵便年金）／船主相互保険組合／火災共済協同組合／農業協同組合（共済）／事業協同組合、消費生活協同組合及び漁業協同組合（共済）など／相互救済事業を行う公益法人	
B 保険業法による免許事業	29
主務大臣による営業の免許／嚴重な監督／兼業の制限／事業主体の制限／生命保険と損害保険との兼営の禁止／損害保険事業に対する共同行為に関する独禁法の適用除外	
C 生・損保別事業体制と第三分野への相互乗入れ	37
生保・損保と商法の規定／生・損保いずれでもない保険／傷害保険・疾病保険と第三種	

保険／傷害・疾病保険の分野調整／第三分野への相互乗入れと生・損保兼営禁止政策

D 保険産業の規模	42
-----------	----

就業者数／営業組織数／収入保険料（農協等の共済掛金収入を含む）／保有契約高

2 保険産業の特色	47
-----------	----

A 営利企業と非営利企業の混在	47
-----------------	----

会社（株式・相互）企業・組合企業及び公企業——経営原則の差異／非営利企業による

巨大な営業量

B 保険市場における取引対象の特性	49
-------------------	----

取引対象としての保険サービスは複合サービス／同類の保険取引集団との内的関連性／少額な経常費による多額な保障／自助の精神の有機的経済的結合／保険需要の潜在性／危険率と保険サービスに対するニーズ／期間的持続性と信頼性の必要／保険証券の交付と保険約款の利用／生命保険と損害保険の差異

C 保険企業の特質	60
-----------	----

企業形態による経営条件の異同／大量販売なくして保険サービスなし／生産と販売の不可分性・同時性／大量の外務員と代理店／金融機関性／公共性・社会性／保険商品の類似性／厳格綿密な監督と強力な行政指導／固有な企業形態——相互会社／景気の影響

度／国際性の程度／生保企業と損保企業の差異

第2章 保険産業の沿革

1 生命保険事業の沿革

最初の生命保険会社（明治一四年）／生保会社創設ラッシュ——明治二・三〇年代／保険業法の公布・施行（明治三三年）／最初の相互会社（明治三五年）／明治のおわり頃から大正時代に設立されたもの／団体生命保険専門と再保険専門の会社（昭和九年～一一年）／戦後における徴兵四社の転進及び月払保険の発売／第二会社の設立と相互化（昭和二二年）／戦後の生保二〇社体制と団体保険の独占廃止／生保事業の再建及び躍進——国民一人当たり契約高世界第一位／新規参入生保会社（昭和四七年～五六年）

77 77

2 損害保険事業の沿革

最初の海上保険会社（明治一一年）／最初の火災保険会社（明治二〇年）／損保会社の乱設・倒産・合併——明治・大正時代／関東大震災（大正一二年）による罹災契約と「見舞金」／統制経済体制下の損保会社の整理統合——戦前の昭和年代／戦後三〇数年間の新設会社

90

3	簡易生命保険事業の沿革	103
---	-------------	-----

官営独占による簡易保険事業の開始（大正五年）／郵便年金事業開始（大正一五年）／創始期／終戦／戦後のインフレと独占廃止／簡易生命保険事業の再建と発展／郵便年金の改善・復活

4	共済事業の沿革	109
---	---------	-----

北海道共済農協連（昭和二三年）／愛知共済・北共済（昭和二七年）／消費生協による共済事業／全水共の設立（昭和二六年）／地方自治法による相互救済事業

第3章	保険企業の活動	115
-----	---------	-----

1	生命保険企業の活動	115
---	-----------	-----

A	保険募集と危険選択	115
---	-----------	-----

大数の法則と保険団体／外務員が原動力／外務員の変動と質／クーリング・オフ制度／危険選択

B	生命保険商品	120
---	--------	-----

生命保険の基本種類／個人保険の販売種類／団体保険の販売種類／財形保険の販売種類／生保商品等に関する諸制度

C	保険料率及び保険料	133
	保険料の算出／保険料率の構成／予定死亡率——生命表の死亡率／予定利率／予定事業費率／生命保険の保険料率の変遷（昭和二十一年～現在）	
D	保険契約準備金及び保険業法八六条準備金	142
	保険契約準備金／責任準備金の内容／保険料積立金の推移／平準純保険料式とチルメル式——保険料積立金／支払準備金と契約者配当準備金／保険業法八六条準備金	
E	資産運用	148
	安全・有利な運用——公共性も加味して／運用資産の構成——過半を占める財務貸付／公共投資／金融機関の役割も果たす生保	
F	契約者配当	154
	概算払いの保険料／精算のための契約者配当／剰余金と契約者配当準備金／契約者配当金分配の計算方法／長期継続契約に対する特別配当	
2	損害保険企業の活動	158
A	保険契約の引き受け	158
	アンダーライティング／代理店確保の必要／代理店制度の改善	
B	損害保険商品	161

損害保険事業の種類／おびただしい数の損害保険商品

C 保険料率及び保険料	168
-------------	-----

保険料の算出と保険料率の構成／保険料率——一定率・範囲料率・標準料率／協定料率・算定会料率・自主料率／料率と監督官庁の認可／損害率と事業費率——保険料率検証のめやす

D 危険分散と再保険	172
------------	-----

大数の法則と危険集団モデル／危険選択、共同保険、再保険——危険の平均をとるための保険技術

E 担保力——責任準備金・資本金等	175
-------------------	-----

担保力／責任準備金

F 資産運用	177
--------	-----

事業損益と事業外損益／運用資産の構成——有価証券と貸付金が優位／資産運用利回り——比較的低い

第4章 保険市場の構造	181
-------------	-----

1 生命保険市場の構造	181
-------------	-----

A	生命保険市場の集中度	181
	民間生保・簡保・農協生命共済の保有契約高と国民所得／上位企業生産集中度・ハーフインダール指数による集中度測定	
B	生命保険市場における製品差別化	191
	基本的には同質な生保商品／セールスマンとの出会い、商品知識・情報の不足、企業の知名度	
C	生命保険市場への参入障壁	193
	経済的参入障壁／法的参入障壁——事業監督行政とのかかわり	
D	生命保険市場の成長率	195
	国民所得の伸びを上回る保有契約高・総資産の増加／収入保険料の個人可処分所得に対する割合	
2	損害保険市場の構造	198
A	損害保険市場の集中度	198
	損害保険市場では元受二〇社が主役／上位企業生産集中度・ハーフインダール指数による集中度測定	
B	損害保険市場における製品差別化	209

統一保険約款——品質の同質性についての一証明／代理店とのかかわり、会社の評判

C 損害保険市場への参入障壁 211

事業の経済的特性による障壁／免許制による法的障壁

D 損害保険市場の成長率 213

国民総生産の伸びを上回る損害保険契約高

第5章 保険産業の市場成果と課題 215

1 生命保険の市場成果と課題 215

世界第二位の規模の大きな市場／生命保険料の引き下げ、解約・失効率の改善／高齢化社会への対応と個人年金保険市場の育成／一つの流行——厚生年金＋企業年金Ⅱワ
ンセット／市場の成熟化、ニーズの高度化と新たなソフトウェア／良質な生命保険商
品を低廉な価格で／長期継続契約向けの特別配当制度の定着とより一層の充実／資産
運用の改善／信頼できてサービス精神の旺盛なセールスマンの育成／生保についての
わかりやすい情報提供と生保事業経営に関する情報提供／モラル・リスク対策

2 損害保険の市場成果と課題 225

世界第四位の規模の市場／新商品の開発、既存商品の改善／地震保険制度の改善／販

売チャネルの効率化／損害保険料率の合理化／企業間有効競争の促進／消費者のため
の情報の提供を／資産運用の改善／モラル・リスク対策

用語解説

.....

237

参考文献

.....

246

用語索引

.....

264

図表目次

図 1・1	生保・損保・簡保・農協共済等の収入保険料	45
図 1・2	生命保険の保有契約高	46
図 4・1	生産集中度・ハーフィングール指数・総合 類型間の対応	190
図 4・2	生命保険保有契約高・生命保険総資産及び 国民所得の推移（指数）	197
図 4・3	損害保険契約高・損害保険元受収入保険料 及び国民総生産の推移（指数）	213
表 1・1	生保・損保・簡保及び農協共済就業者数	43
表 1・2	生保・損保及び簡保の営業機関数	43
表 3・1	日本全会社生命表（一九七二〜七六）によ る死亡率・平均余命	135
表 3・2	生命保険の保険料率の変遷	141
表 3・3	保険年度別純保険料の分解と保険料積立金 の推移	145

表 3・4	保険料積立金における平準純保険料式と5 年チルメル式	146
表 3・5	生保会社の資産運用利回りの変遷	149
表 3・6	生保会社の資産運用率と運用資産構成率の 変遷	151
表 3・7	主要金融機関の資金量	153
表 3・8	主要金融機関の株式保有状況	153
表 3・9	損保会社の資産運用率と運用資産構成率の 変遷	177
表 3・10	損保会社の資産運用利回りの変遷	178
表 4・1	国民所得と生命保険保有契約高の比較	182
表 4・2	生命保険会社の保有契約高	184
表 4・3	生命保険会社の収入保険料	186
表 4・4	生命保険会社の総資産	188
表 4・5	生保会社の生産集中度・ハーフィングール 指数	189
表 4・6	生命保険種類別の保有契約高	196
表 4・7	収入保険料（民保・簡保・農協生命共済） の個人可処分所得に対する割合	197

表 4・8	損害保険元受収入保険料……………	199
表 4・9	損害保険会社の元受収入保険料……………	201
表 4・10	損害保険会社の正味収入保険料……………	202
表 4・11	損害保険会社の総資産……………	203
表 4・12	損保会社の生産集中度・ハーフィンダール 指数……………	204
表 4・13	損害保険種類別元受収入保険料……………	206
表 4・14	主要損害保険種類別正味保険料の推移……………	207
表 4・15	主要損害保険種類別元受収入保険料マーカー ット・シェア……………	208